

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第1回

* Bel Paese イタリアの国土と自然 *

立元 義弘

イタリアと言えば遠く離れた西洋の一国であるにも拘わらず、あらゆる世代の多くの日本人にとって最も親しみを覚える国のひとつではないでしょうか。既に言い古された表現を使うと、地中海の陽光に輝く長靴の国、少しいい加減なところもあるけれど陽気で人生の楽しみ方を知るイタリア人といったところが一般的に定着したイメージでしょうし、もう少し真面目に見た言い方をすると、ローマ時代から中世に至る数多くの歴史的な文化・芸術遺産を誇る一度はこの目で実物を見に行きたい国、歌詞の内容までは知らなくても美しいメロディが鼻をついて出てくるカンツォーネや数々の名優と共にたくさん名画で一世を風靡した国、そして、現代の私たちの生活においても、洗練されたファッションやデザインの発信地として、また、食文化の面でも今やたいの代表的なメニューはそのままイタリア語で普通に通じるほどに、非常に馴染みの深い国です。

このイタリアも少子高齢化、若年失業、南北経済格差、不法移民、汚職や犯罪といった深刻で根深い社会問題を抱え、また、日本と同様一昨年のリーマンショック以降の経済危機に苦しんでおり、国家財政のみならず多くのイタリア人の暮らし向きもかなり厳しいものになってきているようです。例えば、イタリア人にとって夏のバカンスは何を差し置いてもというぐらいに大事なイベントだったはずですが、今年は5人に3人がバカンスを諦め、バカンスを楽しむ余裕のある人々も1週間とか長くても10日間と例年より短縮する傾向にあるとの

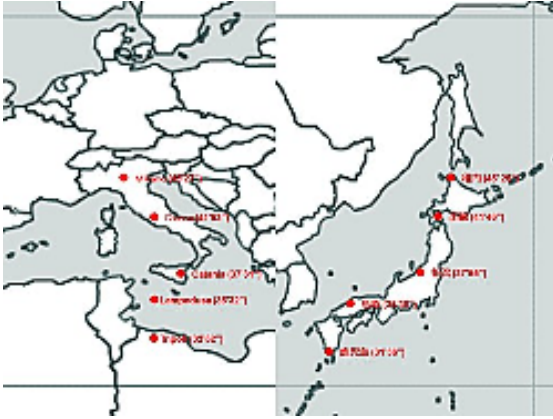
ことで、キーワードは Rinviare (延期)、Risparmiare (節約)、Rinunciare (取止め) の3Rと言われています。政府もベルルスコーニ首相自らが、「今年のバカンスは青空と太陽と海の国、歴史と文化と芸術の国、イタリアを再発見しよう。」と異例のTVスポットで国民に呼びかけ、景気浮揚の一助にと躍起のPRを図りましたが、このような状況下ではあまり効き目はなかったようです。

私は数年前までミラノを中心に約20年間イタリアに住んでいたのですが、この度日本イタリア京都府会館からお話を頂き、Italia oggi と題して今日のイタリアの姿についての記事を今回から数回に分けて書かせて頂くことになりました。拙い知識と経験ではありますが、いろいろな切り口から日本との比較や体験談なども交えながらご紹介して行きたいと思いますので、イタリア大好き人間の読者の皆さんに多少なりとも関心を持ってお読み頂ければ幸いです。

連載第一回目の今回は、イタリアという国と自然について、地理的な観点からみた話から始めたいと思います。

ヨーロッパ大陸の南端に突き出た片足を地中海でじゃぶじゃぶと洗っているイタリア半島、そしてそのつま先に並ぶシチリア・サルデーニャの二つの大きな島とその他の小さな島々からなる国、イタリア共和国。日本からおおよそ1万キロ離れた、日本の国土の約80%、約30万平方kmのこの国

は、誰もがすぐに思い浮かべることができる特徴的な形をしています。



【図1 日伊緯度比較】

緯度的には日本よりだいぶ北に位置しており、両国の地図を横並びにしてみると、ミラノが北海道の最北端の町、稚内、ローマは同じく北海道の函館に並びます。ずっと南に下ってシチリアのカタニーヤでもまだ新潟で、鹿児島となるともうアフリカ大陸でリビアのトリポリよりも南になってしまいます(図1)。南北1200kmに伸びる国土ですので、春も浅くまだ肌寒い天候不順の日が続くミラノでは上着が必要な一方で、シチリアでは気の早い人々が海水浴を楽しむというようなことも珍しくありませんが、函館の平均年間気温が9.8℃であるのに対してローマは16℃ですから、日本よりかなり北に位置するもののやはり地中海性の温暖な気候に恵まれた国であるということがわかります。

安倍元首相の政策構想「美しい国、日本」はまだ記憶に新しいですが、イタリア人も自らの国をBel Paese(美しい国)と呼びます。冒頭で書いたようにベルルスコーニ首相もイタリアを「青空と太陽と海、そして、歴史と文化と芸術に恵まれた世界に比類のない国」と宣伝していますが、Bel Paeseという呼び方はイタリアの持つ豊かな自然や数多くの歴史的・文化的遺産から見ても決して手前みその自画自賛とは言えないでしょう。

自然という観点からイタリアを北から南へざっと縦断してみましょう。西から東にフランス・スイス・オーストリア・スロベニアの4カ国と国境を接しながら3~4000メートル級の峰々が連なるアルプス山脈、コモ・マッジョーレ・ガルダといった湖水地域を越えると、4つの州をまたいで流れる全長65

2kmのポー川に沿って広がるパダーナ平原、夏にはヒマワリ畑が一面に咲き誇るトスカーナ、ウンブリアの丘陵地域、イタリア半島を背骨のように南北に走るアペニン山脈、ティレニア海、イオニア海、アドリア海に囲まれた7400kmに及ぶ半島の美しい海岸線とそれに沿って点在する島々、そして、南国情緒豊かなシチリア、サルデーニャの2島。土地、土地が持つこの国の自然の表情は千変万化の豊かさで、これこそがイタリアを代表する風景だということはまず不可能なくらいです。

更にもっと不可能なことといえば僅か数行でイタリアの無尽蔵ともいえる歴史・文化遺産を語ることですので、ここでその無謀は冒さないでおきますが、ひとつ参考までにご紹介しますと、イタリアはユネスコ世界文化遺産の登録件数最多(45件、2国間にまたがるものも含む。内、自然遺産は3件)の国で、更にバチカンとサンマリノにもそれぞれ1件が登録されています。ちなみに、2位はスペインの42件、以下中国 40件、フランス 35件、ドイツ 33件と続き、日本は14件で15番目(注1)。それこそイタリアのどこを旅行しても世界文化遺産のひとつや二つに必ずぶつかるといった感じです。

もうひとつ、イタリアの国土に関して特色のある点としてあげられるのは、二つのエンクラベ(enclave)とひとつのエクスクラベ(exclave)です。どちらもイタリアから見た呼び方ですが、エンクラベとは自国領土内の他国領土のことで、エクスクラベとは逆に他国領土内の自国領土の飛び地のことです。

エンクラベの方はバチカン市国とサンマリノ共和国という二つの独立国家のことだとすぐにおわかりになったかと思います。カトリックの総本山であるバチカン市国は世界最小の独立国家で、その国土面積は0.44平方キロと東京ディズニーランドよりも小さく、人口は約820人とされていますが、これらの人たちはほとんどが聖職者関係の人たちで、実際には多くのイタリア人がバチカン内部でのいろいろな仕事に職員としてイタリアから“通勤”しています。もうひとつの国家、サンマリノ共和国はイタリア中部、アドリア海のリゾート地リミニから少し内陸に入った丘の上にそびえる人口3万人の小国で、面積61平方キロとおよ

そ東大阪市くらいの広さの世界で5番目に小さな国です。両国ともEU加盟国ではありませんが、国境に税関などはなく行き来は全く自由で、サンピエトロ広場を囲む柱廊をくぐればそこはもうバチカンだし、サンマリーノは「古の自由の地へようこそ」と書かれたゲートにもあまり気づくことのないまま‘入国’です。通貨はユーロ、話される言葉はもちろんイタリア語です。



【サンマリーノの歓迎ゲート】

イタリア領土の飛び地であるエクスクラベの方ですが、こちらはミラノから北へ向かい、コモを通過して一旦スイス領内に入り車で約30分、ルガーノ湖畔のカンピオーネ・ディ・イタリア (Campione d' Italia) と呼ばれる小さな町で、公営の立派なカジノがあります。イタリア領土とはいえ実態はスイス領内にいるのと同じで、例えばここからミラノに電話をかけるのもスイスからの国際電話扱いです。(話が戻りますが、バチカンもサンマリーノもイタリアとは異なる国際電話の国番号がそれぞれあります。)

2009年からはスイスもシェンゲン協定加盟により国境検査は原則撤廃ということになったものの、以前はイタリア本土とスイス国境でのパスポートチェックがありました。私もミラノに住んでいるときにこのカンピオーネ・ディ・イタリアのカジノに車で勇んで出かけたことがあります。途中でパスポートを忘れたことに気づき、国境手前でまた家まで引き返し、出直したことを思い出します。

(その時の戦果がどうであったかは忘れてしまいましたが・・・)



【Campione d' Italia の公営カジノ】

第1回目の今回は国土、自然といったテーマで Bel Paese イタリアの横顔を少しだけ書いてみました。次回以降は今日のイタリア社会、イタリア人の素顔と生活などについてまとめてゆきたいと思っています。

注1) UNESCO.org World Heritage List より 2010.8.25 調べ

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)



【Campione d' Italia 遠景】

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

ベストイアリオ
イタリアロマネスクの動物誌

第1回

尾形 希和子

●ロマネスクの時空

ロマネスク美術は、ここ数年特にフランス、スペイン関係の刊行が続き、日本人にとってもより親しみのあるものになったように見える。都市や農村の生活に関する社会史研究や心性の研究が進む中で、西洋中世のイメージそのものが、封建領主たちの繰り広げる血なまぐさい歴史に彩られた城塞、閉ざされた暗鬱な修道院の世界、あるいは一転して華やかな宮廷生活といった限られたものから塗り替えられ、今では庶民生活の生き生きとした日常の一端も知られるようになった。領主から農民まで中世の人々の生活において、特に教区教会堂は誕生や死という人生の重要な節目だけでなく、日々の様々な局面に欠かせない場所であった。ロマネスクは修道院の時代、ゴシックは都市や大聖堂の時代と一般的には言われるが、イタリアでは都市国家の発展が早く、多くの大聖堂もロマネスク様式で建設された。教会堂の鐘は、修道士や聖職者の祈祷の時間だけではなく、都市民や農村の仕事の時間をも刻むようになった。「教会の時間」と「世俗の時間」が重なり合い、12の月とその労働や黄道十二宮の記号を描く月曆など、世俗の「時間」が教会堂に彫刻・壁画・モザイク画で描かれるようになった。

時間だけではない。教会堂は全宇宙の空間を映し出す宇宙の鑑(imago mundi)でもあった。ことにビザンチン世界ではより厳格に定められた図式に従い、教会堂の円蓋は天上世界を表し、壁や床には地上的世界が反映された。キリスト教の知のシステムの中に自然や世界に関する知識を組み入れようとする動きの中で、世俗的・物質的世界が教会堂の床や壁に描かれたが、とりわけ足で踏まれるため聖像が避けられる床モザイクには、美德と悪徳の戦い、年の擬人像(アンヌス)に支配される12の月や世界地図(mappa mundi)など

の世俗的図像が百科全書の頁のように展開された。

●動物や怪物に満ちた教会堂

キリスト教の教会堂の内外の装飾に、聖書のエピソードやキリスト教の教義に基づいた象徴的図像、説話的図像、諸聖人の図像に混じって世俗的図像が存在するのはロマネスクに限ったことではないが、ロマネスク教会堂では、聖と俗が分かちがたく渾然一体となっている。

世俗的図像の中には、大道芸人や卑猥なポーズを取る人物、寓意像などの人間像だけではなく、動物、植物、怪物、異形像もある。むしろロマネスク教会堂はそうしたものに満ちているとさえ言えるが、ただそれらは一般的なロマネスクの解説書ではあまり紹介されてこなかった。柳宗玄はフランスの多くのロマネスク聖堂がいかにも「野獣怪物」に満ちているかを次のように書いている。



【図1 モデナ大聖堂、魚屋の扉】

ロマネスク建築を飾る絵画や彫刻の図像について、美術史家が一般人に与える心象は、かなり不正確のように思われる。試みにロマネスク彫刻に関する出版物を開いてみると、その図版の八、九割までが人間像である。このことからして、実際にロマネスク建築を訪問したことのない者は、ロマネスク彫刻の大部分が人間を主題としたものであるという錯覚を起す。ところが実際はそうではない。たとえば、聖堂内部や回廊の列柱を飾る柱頭彫刻を見ると、地域によって例外なしとしないが、一般には人間像を見ることはむしろ稀である(注1)。

日本人にロマネスク美術が親しみ易いとしたら、ひよっとするとそれが人間像に満ち溢れていない

からだろうか。ヨーロッパの美術館やモニュメントをしばらく観て回ると、古代やルネサンスの完璧なプロポーションと筋肉を誇示する人体の横溢に目眩を感じてしまう。ロマネスクの装飾性や、素朴でデフォルメされた人体や動植物の図像は、「野獣怪獣」が好きかどうかはともかくとして、本質的に花鳥風月の美術に慣れ親しんでいる日本人をほっとさせるのかもしれない。

●動物や怪物の存在理由

モデナ大聖堂の北側の扉口は、かつて市の立った広場に面しており、魚屋の扉(porta della pescheria)と呼ばれている。アーキヴォルトには「アーサー王の物語」のエピソードが刻まれ、楣石にはアイソポス(イソップ)の動物譚や『狐物語』の場面が描かれている。側柱の内側には12月の労働が描かれ、側柱正面は動物や怪物に混じってアイソポスの「鶴と狐のご馳走」の場面などを宿す蔓草に覆われている。ロマネスクは世俗の物語(ロマンス)の時代でもあるが、世俗文学のモチーフがとりわけ多いのは、この扉がより市民生活に関わりの深いものであったからだと言われている(図1)。しかしタンパンやアプシスのように重要な場所にも、怪物や動物の図像は少なからず描かれてきたにもかかわらず、それらは概して「単なる装飾」であるとみなされてきた。キリスト教の立場からは打ち負かされるべき「悪」や「罪」として、または「悪の誘惑」に惑わされがちな信者たちにその危険を常に思い出させる警告や戒めとして、教会堂に描かれる存在理由を持つのだと言われてきた。あるいはキリスト教以前の異教的、呪術的な要素の残滓や、石工ら制作者たちが慰みとして写し出した世俗社会の光景とみなされ、そこに積極的な役割を見いだそうとする努力はなされなかった。柳はロマネスクの図像に関する一般的な誤解の原因は「動物その他の主題のもつ意味を深く掘り下げる努力を怠らせる」人間中心主義であったかもしれないと指摘している(注2)。「人体」を世界の中心に据え、万物の尺度、美の基準とするギリシャ・ローマの古典美術を、北方ゲルマン民族に特徴的な空間恐怖に衝き動かされたかのような過剰な生命の蠢きに満ちた装飾に対して優位に置き、前者を明晰で合理的、理性的なもの、後者を非合理的な蒙昧さとみなしてき

た西洋の思想の伝統は、動物や怪物的なものを理性から遠いものとして「装飾」の範疇へと追いやってきたのではないだろうか。確かにロマネスク教会堂の扉口を取り囲む動物や怪物はまるでケルト装飾の動物組紐文のように互いに貪り喰い合い、時には身をよじらせる裸の人間と共に植物の蔓の中に絡まり、奇怪な連続模様を作り出している(図2)。しかし悪夢のようなこのアンサンブルも周辺を縁取る単なる装飾なのではなく「世俗世界」の象徴である。これについてはまた稿を改めて述べたい。



【図2 カステルリタルディ教区教会堂】

●人間と動物の境界

個々の動物たちが表す寓意や象徴は、聖書やキリスト教文学、紀元二世紀にエジプトのアレクサンドリアで書かれたと言われる動物・怪物・鉱物などの性質をキリスト教の寓意で説く『フィシオログス』、そこから派生し教会教父やラバヌス・マウルスやセビリアのイジドールスなどの百科全書的著作などから汲み上げた情報を加えて中世の間大いに流行した『動物誌』の記述により、解釈される。もちろん動物は美德や聖なるものを表すこともある。黙示録の四つの活物(いきもの)や四福音書記の象徴の動物もあれば、一角獣や獅子のようにキリスト自身と同時に悪魔をも表す両義的なものもある。

世俗世界を表す蔓草の中に棲息する怪物や動物は罪や危険に満ちた存在であるが、一方で、世界地図の中で様々な異境の地を示す記号的存在でもあり、たとえばパルマ洗礼堂の外壁面を取り囲むように刻まれた動物や怪物たちの姿は、洗礼によって駆逐されるべき悪徳であるとも、キリストの福音が到達する地理的境界を表しているとも

考えられる(図3)。辺境世界を野獣や怪物に満ちたものとして表象するのは、ヨーロッパ中心主義、キリスト教中心主義の常套手段である。



【図3 パルマ大聖堂洗礼堂外壁】

しかし、ロマネスク教会堂の図像の中では中世の物語でしばしば起こるように、動物が人間に、人間が動物に容易に変身する。阿部謹也は、中世には人間と自然の対立や身体とそれを取り巻く世界との絶対的境が存在せず、動物やモノと人間の境は流動的である、と言っている(注3)。キリスト教の神は人類を自身の似姿に作り、地とそこに棲むすべての動物を支配させたが、ロマネス

ク時代の人間がいつ何時動物や怪物に変身してしまうかもしれないと恐れながら暮らしていたのだとしたら、人間と動物間のヒエラルキーさえも絶対的、固定的ではなくなるだろう。人間と、動物を含む自然の関係を理解する上できわめて重要な鍵を動物や怪物は握っているのだ。次回から、イタリアのロマネスク教会堂に描かれた個々の動物や怪物の図像を取り上げ、ロマネスクの世界観・宇宙観を探っていきたい。

注1) 柳宗玄『ロマネスク彫刻の形態学』八坂書房、2006年、57頁

注2) 柳宗玄『前掲書』62頁

注3) 阿部謹也『よみがえる中世ヨーロッパ』日本放送出版協会、1986年、25、39頁

(沖縄県立芸術大学教授)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

10月開講の秋期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 梅田:大阪駅前第4ビル
- 10/6(水) 19:00~20:30
- 10/10(日) 13:00~14:30
- 10/10(日) 15:00~16:30
- 四条烏丸:ウイングス京都
- 10/5(火) 19:00~20:30
- 京都本校:日本イタリア京都会館
- 10/5(火) 11:00~12:30
- 10/9(土) 11:00~12:30
- 10/9(土) 13:00~14:30

スペイン語 無料体験レッスン

10月開講の秋期スペイン語講座に向けて、体験レッスンを開催します。

日時:10/8(金) 16:00~17:30
会場:日本イタリア京都会館 本校
講師:当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

10月開講の秋期語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

日時:10/4(月) 19:00~20:30
会場:日本イタリア京都会館 本校
講師:当館ポルトガル語講師

イタリア語検定 直前講習会

10月3日(日)に行われる実用イタリア語検定の本番に向けて、よく出題される文法事項やひっかけやすいポイントを指導します。

・日時:
内容・時間は京都・大阪いずれも同じ

大阪 9月12日(日)

京都 9月19日(日)

- ①5級向け:10:30~12:00
- ②4級向け:13:00~14:30
- ③3級向け:15:00~16:30
- ④3級作文模試:16:30~17:00

- ・費用:2科目 一般・受講生 3,000円
維持会員 1,500円
- 1科目 一般・受講生 2,000円
維持会員 1,000円

※3級作文模試は別途1,000円で、3級向け対策受講者のみオプションとして受講可

- ・会場:日本イタリア京都会館 本校
同 大阪梅田校

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/